

地域に信頼され、地域貢献できる訪問看護ステーションを目指して

名畑目 明美

(株式会社日本在宅ケア教育研究所 ナースステーション東京)

東京女子医科大学看護学会第 11 回学術集会のシンポジストとしてのご依頼を頂き、光栄であり、かつ多くの事を学ばせて頂き、日沼先生をはじめ関係者の皆様に深く、感謝申し上げます。

シンポジウムのテーマは「2025 年問題に向けた私たちの挑戦」で、私は在宅看護の立場から、訪問看護の現状と課題について、まず在宅医療体制の一部と国内の訪問看護の調査結果から国内の訪問看護の現状と課題を述べ、次に新宿区の訪問看護や弊社の活動から私が感じる地域の課題を述べた。

国内の訪問看護の課題は、訪問看護に従事する看護師は 4.1 万人で全看護職員の 2% にあたり、極めて少ない現状であり、訪問看護師の量的拡大が急務であること。また訪問看護の利用者も癌末期患者、人口呼吸の装着者等医療ニーズの高い利用者が増えていること。重度障害のある小児や精神障害のある在宅生活者、認知症者など多様化していること。一人暮らしや高齢者世帯、老老介護、認認介護など世帯構造の変化と介護基盤の弱体化も加わり、複雑化した多問題を有する利用者が少なくない事等を述べた。

次に地域の課題として私が現場で特に感じることは「予防的視点の薄さ」である。訪問看護の導入が入退院を繰り返されたのちや、医療処置が多くなってからが多い。「早期から予防的な視点で生活の場に医療を組み込む体系が重要」だと考える。

今後は、「地域に信頼され、地域貢献できる訪問看護ステーションを目指して」一人一人の利用者やその家族双方の支援を大切に、事例検討や研修等でサービスの質の向上を図り、規模の拡大を図って行きたい。また、2025 年に向けて、地域の多機関・他職種とも「顔の見える関係」と信頼を構築し、地域での問題共有や対策を話し合い、地域ケアシステムに貢献して行きたい。地域の方々には、もっと訪問看護を知って頂き、健康の保持増進、疾病の悪化予防、家族支援に役立てるよう、地域参加も企画したい。
